

# 日手会温故知新VI： 令和時代に「手の日」がなぜ必要か

名誉会員：上 羽 康 夫（京大 昭35年卒）

名誉会員：石 井 清 一（北大 昭36年卒）

名誉会員：生 田 義 和（広島大 昭37年卒）

平成31年は4月で終わり、5月1日からの年号は「令和」と改められた。年号が変わる直前の平成31年4月17日（水）に札幌市では加藤博之理事長・岩崎倫政会長らによって第62回日本手外科学会（以下、日手会と略す）代議員会が開催され、そこで生田義和名誉会員の提案である「手の日」創立案が承認された。此の時期に「手の日」創立が何故必要なのかをもう一度考えてみよう。

往年の日手会員諸兄・諸姉は記憶されている筈だが、1994年（平成4年）の第37回日手会々長であった生田義和はその学会直後に「手の日」設立を提案したのであるが、諸般の事情によりそれを実現するに至らなかった。だが、第36回日手会々長であった石井清一および第35回日手会々長を務めた上羽康夫らはいつの日か我が国に「手の日」が設立されるのを長年待ち望んでいたのである。令和時代にはIT革命が更に進化するから新時代の初年度に「手の日」が設立できれば最善だとの意見に奇しくも一致していた。記念日の設立には種々な配慮を要するが、少なくとも下記の4点は必要条件であると考える。

- (1) 「手の日」は誰のための記念日か？：人類が二足歩行を始め、両手で道具使用が可能となり、投げ槍や弓矢を使って狩猟を行い、鋤や鎌を使って農業を行うようになった。産業革命時代以降は機器を使い船舶、汽車、自動車、飛行機、ロケットなどを造るようになった。現代社会ではIT革命が進み、日常生活でもパソコンやスマートフォンなどが普及し、手を使う機会が一段と増加した。現代では第一次産業は言うに及ばず、第2次・第3次産業界においても頻繁に手を使用し、効率良く生産能力を高めている。現代社会における手の重要性は十分に認識されているが、一般人は日常生活の中で手の重要性を実感することは殆どない。最大の原因は手の機能が余りにも素晴らしく、心のままに動く手を殆ど無意識に使っているからだろう。丁度、私達が毎日空気を吸って生活しているのに、空気の有難さを実感していないのに似ている。損傷されて手が使えなくなった時、初めて手の有難さを知り、手の重要性を再認識するのです。職場で手を使用する人達、例えばIT器機を使う事務員、道具を使う大工・左官屋、筆や楽器を使う画家・演奏家などは常に手の重要性を実感し、感謝しているだろう。従って、人々が年に一度だけ「手」に感謝する日があっても不合理ではないでしょう。手の機能と障害に深く関わる手外科医が率先して「手の日」設立を提唱するのも妥当でありましょう。ただし、「手の日」はあ

くまでも日本人全員が「手」に感謝する日であり、手外科医のための記念日ではないことを十分理解しておくべきであります。

- (2) 日本医療界への手外科アピール：我が国においては手外科の特殊性・重要性が未だ十分に理解されていない。手外科は第二次世界大戦直後の1946年に米国で誕生し、1957年に我が国に導入された比較的歴史の浅い医学領域である。手外科領域と同様に比較的狭い領域を対象とする専門分野でも、眼科や耳鼻科は長い歴史を持ち、社会的にも知名度は極めて高い。更に医学界では心臓・肺・消化器などの生命維持に直結する分野は重視されている。特に、外科領域ではその傾向が著しい。それに反し、生死に直接関与しない手外科はやや軽視される傾向にある。然し、現在のIT社会で生活を維持するには手は不可欠と言えましょう。心臓・肺・胃腸などの生命維持器官と同様に現代人が生きて行くための重要な器官です。手の小さな筋腱や細い神経・血管を修復する高度な手術を手外科医は行っています。技術面でも他の外科分野と同等の修練を要するのですが、未だ知名度は低いです。「手の日」に手の重要性をアピールし、手外科の特殊性・重要性をアピールする良机になるでしょう。
- (3) 手の障害予防を推進：近頃の若い人達がスマートフォンなどのIT器機を手指で荒っぽく操作するのを見ていると、近い将来に手指の深刻な障害が多発するのではないかと懸念します。そのような事態が起これぬよう正しい手指の使用動作を考案し、指導するのも手外科医・ハンドセラピストの重要な任務であると考えます。令和時代には手の重要性は更に高まり、手の障害も更に深刻となりそうですが、「手の日」には手指の正しい使用法や障害治療法についての講習会も開催できるでしょう。
- (4) 「手の日」設定に関わる“Hand”と「手」の概念：一年のどの日を「手の日」に設定にするか具体的に考える時、英語“Hand”と日本語「手」との間に概念の差異があることに留意すべきでありましょう。“Hand”は欧米に伝わる解剖学的用語であり、心臓heartを中心とした人体部位を規定する用語の一つであります。“Hand”は心臓から上腕・前腕を経て上肢の最末端に付く小器官と規定されています。他方、「手」は古来中国よりの概念を引き継ぎ、一般的には肩から以遠の上肢を意味する語であります。「袖に手を通す」とか「別れに手を振る」とかに使われる手は上肢全体を意味します。「別れに手を振る」の手では、心を込めて精一杯肩と腕を大きく振る動作を意味し、手先だけを動かす「おいで、おいで」や「バイバイ」の動作とは全く違います。現在、私達が使っている「手」は狭義語であり、欧米から解剖学を導入した時に上腕arm、前腕forearm、手handに対応させた解剖学用語として正式に採用されたものでしょう。兎も角、医学的用語としては手関節より末梢の部位が現在は「手」と呼ばれていることは確かです。けれども、人間の手の系統発生や上肢機能の立場より考える時、手を上肢の先端に付く附着物と考えるのではなく、手の機能を高めるために前腕や上腕が造られたと考えるほうが妥当であります。機能学的観点からすれば手が上肢の中心であると考えべきです。「手の日」が設定されても“Hand day”ではなく我が国古来の概念をも含んだ含蓄のある日本の「手の日」であって頂きたい。いずれにしても日本に関連深く、覚え易く、しかも納得できる日として皆様に愛されるよう期待している。